
夏の夜空

なおとつと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の夜空

【Nコード】

N8335X

【作者名】

なおとつと

【あらすじ】

自分の気持ちに気付かない少女と自分の気持ちがわからない少年のすれ違いを描いたラブストーリー

第1話

高校生活最後の夏

私、千原真夜は恋に落ちた

梅雨が明け

蒸し暑くなってきた7月

ここ戦場ヶ原高校では夏休みの開始が少し早いいためみんなにわか
に浮き足立っていた

「…以上だHR終わりー」

いつもどおりにHRが終わり

いつもどおりに時間が流れていく

友達もみんな楽しそうに笑ったりつまんなそうにしたりしている

そんな中私もある一人の男子と話していた

「おはよう、真夜!」

コイツは水谷蒼弥

隣のクラスで私の幼なじみ
同じ部活に入っている

「…おはよう、相変わらず元気ね」

私が呆れたように言うと言蒼弥は

「高校生活最後の夏休みを前にそんな低いテンションでいるほうが
難しいとおもうけど？」

さも当然のように蒼弥は尋ねてくる

「まだ二週間ぐらい先じゃなかったかしら？
それに夏休みと言っても
今までとそれほど違いは無いと思うけれど…」

すると蒼弥は驚いた顔で

「え？

いやだって高校最後だよ？」

と言ってきた

別に高校最後だろうと
夏休みに変わりはないのでは？

という本心は隠しながら

「そつね」

適当に返事をした。

「そつか…」

蒼弥は少し寂しそうな顔をして自分の席にもどっていった

蒼弥とは長い付き合いだ

前に「真夜のことと言わなくてもなんとなくわかる」と言っていた

多分今のことも通じたのかなと思いつつ授業の準備をした

「いいかー分かったかー」

一時間目

黒板の前で説明する先生をぼーっと見ながら私は朝の蒼弥の事を考えていた

朝の寂しげな顔は何だったのだろうか？

蒼弥は私が休みや行事で騒ぐような人ではないと知っているのに…

もしかして

今回の夏休みは蒼弥にとって何か特別なのかも…

そんなことを考えていると後ろの席の人から綺麗におられた手紙が
回ってきた

受け取ると

『千原さんへ』と書いてある

下に小さく『雨宮渚』と名前が書いてあった

渚はこのクラスになった時に出来た私の親友だ

私は小さくおられた手紙を広げるとそこには小さな丸い文字で

『今日の放課後あいてる？もしあいていたら駅前のカフェいかない
？』

私はその下に

『今日は部活だから無理なんだ』

と書いた

私は天体観測部に入っている

その名の通り空を観察する部活で私は部長を勤めている

受験があるから部活は参加するな、と何度か言われているが

私達の部活は人数がとても少ないため、部を廃部にされないように
日々頑張っている

部員は私と蒼弥

高2の原田君と高1の長屋君、瀬華さんである

ちなみに渚は帰宅部で暇があるとよく私をお茶に誘ってくれる
少し申し訳ない気持ちで手紙を小さくおり直して前の子に回すよう
にお願いした

しばらくしてまた手紙が回ってきたた

渚からだ

『真夜ちゃんって本当に部活好きだよね
気になる男子でもいるの?』

……部活は好きではないし嫌いでもない
男子に対して恋愛感情は無いと断言できる

『部活は部長として行くだけよ、それに気になるほどの男子はいな
いわ』

私はふと蒼弥の事が脳裏に浮かんだ

私にとって蒼弥はどんな存在だろうか

頼りになるただの幼なじみか

頼りになるただの一人の男子か
色々な事を考えていると

授業の終わりを告げる鐘が鳴った

「真夜ちゃん」

次の授業の準備をしていると渚が私に話し掛けてきた

「あら、渚」

「真夜ちゃん、男子に興味無いって書いてあったけど、水谷君はどうなの？」

「蒼弥はただの幼なじみよ」

「あんなかつこいいのにねえ」

『ただの』はないでしょ？」

確かに蒼弥は同じ年代の女子に大人気だけど…

「私にとっては『ただの』幼なじみよ」

すると渚は少し顔を赤らめて

「じゃあ…真夜ちゃんは水谷君に対して恋愛感情はあるの…?」

私は

少し考えてこう言った

「いいえ…ないわ」

放課後

みんなが帰ってなんだか静かになった教室の中

私は日直の仕事で黒板を掃除していた

教室の中は少しだけオレンジ色になった日の光に満たされている

静かな中、私が黒板を消す音だけが響く

一人で静かな場所に居ると

いろいろな事を考えてしまう

今日、渚が聞いてきたことが頭の中でぐるぐる渦巻いている

『真夜ちゃんは水谷君に恋愛感情があるの…？』

渚は多分蒼弥の事が好きなのだろう

でもなんで私にそんなこと聞くのだろうか？

親友としてだろうか…

しばらく考え込んでいたら

後ろでドアの開く音がした

振り向くとそこには

蒼弥がいた

「…」

手を上げてまた私に挨拶してきた

「あら？部活に行かないの？」

私が尋ねると

「ん？いや、後輩は物静かだし、俺部活行ってもやることないし」

「真夜と一緒に行くのかなーって」

「…わざわざ待ってくれてたの？」

「おう！」

「…私が幼なじみだから？」

「よく分からないが…」

「それもあるけど？」

「…私がバカみたい

「…今日は帰る」

「え？」

啞然とする蒼弥

「さよなら」

「ちよっ、おい真夜！！」

なんで蒼弥の事なんかで
悩んだのだろう

私は関係ないのに…

その日は家に帰って

蒼弥にメールした

『ごめんなさい。
あんな態度を取って』

しかしその日蒼弥から返事が来ることは無かった

次の日

教室に入ると

渚が話し掛けて来た

「おはよう、渚」

「…真夜ちゃん、ちょっと来てくれない？」

「いいけど？」

そう言うと渚は私の手を引っ張って教室から連れ出した

「それで、渚は私に何か用？」

渚は顔を真っ赤にして

「あの、これを水谷君にわ、渡して!!！」

そうして差し出されたのは
手紙だった

「これって……」

「お願い!!なにも言わずに渡して!!」

この手紙は私が渡すべきなのだろうか……

渚自身が渡すべきものなのでは？

「とりあえず頼むわね!!！」

そう言うと渚は走って行った

「え？ちよっと……」

その後

私が渚に話しかけようとすると顔を真っ赤にして逃げてしまった

「蒼弥に手紙を渡さないとラチがあかないじゃない…」

途方に暮れてると

「それ俺宛か？」

ひょいと私の手から手紙がとられた

「?!」

「なんだよ、幼なじみが珍しいのか？」

「い、いきなり蒼弥が現れるからびっくりしただけよ」

「で？この手紙は俺宛てみたいだが…？」

「えつと…」

「あれ？差出人が書いてある…」

「…雨宮渚」

「あれ？雨宮渚って…」

蒼弥は私を見て尋ねる

「そうよ、私と同じクラスの子」

そして手紙を渡された事を話した

蒼弥は

「じゃあこの手紙は俺宛なんだな？」

「ええ、そうよ」

「分かった」

そう言うと走って私のクラスに向かって走っていった

放課後、天体観測部

「うーん、暇だな瀬華」

「そうだねー長屋君ー」

今日は午後から雨が降っていてなにもできない状況になっていた

「くそお、テ〇ガ強いぜ」

原田君は携帯ゲームで遊んでいる

私は読書をしていて

蒼弥は天体望遠鏡の整備をしていた

「蒼弥、さっきの話はどうなったの？」

私は蒼弥に渚のことを聞いてみた

「ああその話はまた今度な」

「ちょっと、ごまかさないでよ……」

そこに割り込むように
瀬華さんが

「せんぱーい、夜になったら晴れるそうですよ」

長屋君も

「よし、そろそろ夏の星座も観察できる時期ですね」

蒼弥は立ち上がってこう言った

「よし、今夜は星を見に行くぞ……！」

第1話（後書き）

こんにちは、なおとつとです

この作品は全くノウハウのない素人が描いたラブストーリーです

文法の違い 誤字 脱字は温かい目で見てください

あと更新スピードについてですが

かなり気まぐれです

こんな小説ですがよろしくお願ひします

第2話（前書き）

真夜「あら？あらすじはSS形式なのかしら？」

蒼弥「らしいね、」

渚「で、前はどんな感じだったけ？」

真夜「私たちの日常を切り取ったありふれた話よ」

渚「・・・確かにそうだったわね」

蒼弥「最後に俺が言ったセリフは！？」

真夜「『星を見に行こう』でしょ」

渚「ここから今回は始まります」

真夜&蒼弥&渚「それではどうぞ！」

第2話

蒼弥が部活の時に『今夜星に見に行こう』
と言ったその日の夜

私たち部員一同は見晴らしの良い小さな丘までやってきていた

歴代の天体観察部の先輩たちも良く使っていた場所で
天体観測にはうってつけの場所だ

「わあ〜星がきれいだね〜」

瀬華さんはくるくると回りながら夜空を見上げている

「瀬華さん、回りながらじゃ観測にはならないよ」

長屋君は回っている瀬華さんに注意した

すると瀬華さんは急に不機嫌な顔になり

「だって〜、そんな堅苦しい観測の仕方より
こっちのほうが綺麗に見えるじゃん」

と、愚痴をこぼした

それを聞いて私も夜空を見上げた

そこには、吸い込まれそうな空と

ひとつひとつが綺麗に輝く星があった

瀬華さんがやったように私も回ってみる

すると星は尾を描いて私の上をまわりだす

だんだんと速くなっていく回転

星の光がひとつの光の輪となる

しかし私は目が回ってしまい、足を纏れさせて
草むらに倒れた

仰向けに倒れ、また空を見上げる形になった

「…」

とても澄み切った気持ちだった

いつも見ている教科書とは全く違って

観測に使う望遠鏡とも違う

倒れたまま空を眺め続けていると

「ん？真夜、なんでこんなところで寝てるの？」

私を見下ろすようにして蒼弥が話しかけてきた

「…瀬華さんが言ってたことが、少し気になってね」

「ああ、堅苦しい観測方法がどうか、」

「いつも見ている望遠鏡越しの星とはちがくて
まるで星たちが生きてるような感じだったわ…」

それは私の本当の気持ちだった

自分が柄でもないことを言っているのは
分かってる

「…真夜、隣いいか？」

そう言っつて蒼弥が私の横に座った

「返事を聞く前に座るのね…」

「まあ、いいじゃん」

私は蒼弥に聞きたいことがある

渚のことだ

たぶんあの手紙は渚が蒼弥に宛てた恋文だ

もしそうだとしたら

蒼弥は渚の思いを受け止めるのだろうか…

「あの、蒼弥…」

私が聞こうとしたら
蒼弥は急に立ち上がった

「なあ、真夜。知ってるか？」

星はひとつが輝いているように見えるけど
実は二つの星が光っていることもあるんだって

「その逆もあって

地球から見たら近いように見える

星同士でも実際はとても距離が離れているんだって

「…」

知ってるわよ、という言葉を飲み込んで
蒼弥の次の言葉を待つ

「なんだか人の心の縮図みたいだよな
近いようで遠かったり
やっと一緒にになったのに
分かりあえてなかったり…」

「真夜は、人を好きになったことはあるか？」

「…それは、渚のこと？」

蒼弥は小さく頷いた

やはり昨日の手紙は蒼弥への恋文だった

「蒼弥はどつなの？渚のこと」

蒼弥は落ち着いた様子で

「…わからない」

と答えた

私が蒼弥の方を向くと

蒼弥は真っすぐ空を見上げていた

表情は分からない

「ただ、雨宮さんの気持ちを無碍にするつもりは無いぞ」

そう言っただけ私の方に向き直った蒼弥の目はとても優しくかった

「それじゃ、みんなと合流するか」

蒼弥はそう言っただけ私に背を向け歩いて行った

私が蒼弥について行くと

後輩たちが全員固集まって話していた

「長屋と瀬華は熱心だな」

原田君は携帯ゲーム機を片手に持って

長屋君と瀬華さんに話かけている

「逆に聞きますけど、原田先輩はなんで観測せずにゲームなんですか？」

長屋君が問いかけると

「俺が天体観測自体もう飽きているから、かな？」

長屋君がむっとした顔で

「じゃあ、なんで…」

と長屋君が言いかけたところを瀬華さんが止めた

「やめなよ、長屋君」

「でも、同じ部活の人間としてなんでこの先輩が部活にいるか聞かないと…僕の気が収まらない」

すると原田君は突然夜空を指差した

「俺らの上に輝く星

あれが織姫様だ

そしてそこから天の川の東にるのが彦星様だ
さらにひときわ輝いている星で
夏の大三角ができる」

そして今度は
長屋君を指差す

「ひとつ言っておく俺がここにいるのは
星が好きだからだ」

そう言うと携帯ゲームを鞆にしまい

蒼弥と私に一言言って帰って行ってしまった

長屋君と瀬華さんも

いたたまれなくなったのか

その後すぐ帰ってしまい

この日の天文観測部の

野外観察は終わった

週の終りの土曜日

だんだん照りつける日の光が強くなってきた
お昼頃

私は白いワンピースを着て
近所のコンビニに来ていた

良くこのコンビニには来ていて
漫画を立ち読みしたり

お菓子を買ったりしたいた

昨日の天体観察の記録を顧問の先生に
提出するためにレポート用紙を買いに来ていた

昨日蒼弥にメールで

『先生に提出するレポートを作るから
手伝ってくれない？』

と送ったが

『悪い、明日用事があるからごめんな』

と断られてしまった

後輩達に手伝わせるのは気が引けたので

結局、私一人でやることになった

コンビニでレポート用紙を買って
外に出る

さて、どこでレポートを書こうかしら…

とりあえず静かな図書館にでも行こうと
道を歩いていると

反対側の道に渚を見つけた

「あら、渚…」

声をかけようとして

手を振ろうとした時

隣に私の見慣れた男子がいた

私の良く知っている…

「蒼弥……………」？

第2話（後書き）

こんにちはなおとつとデス

昨日アクセス数閲覧を見て予想以上に

いろんな人が見てくれていて

とても感動しました！

今後もよろしくおねがいします

第3話（前書き）

真夜「まさか、最後があんな終わり方とはねえ…」

渚「いいじゃない！前は一言もしゃべってないのよ?!」

蒼弥「いきなり、デートだもんなあ…」

真夜「まあまあ、青春ね」

渚「…真夜ってこんなキャラだった？」

蒼弥「キャラなんて作者のさじ加減ひとつだろ」

真夜「…蒼弥、レポートの事絶対忘れないから」

蒼弥「え?…ちよつと?真夜さん?」

渚「水谷くん、女の恨みは怖いわよ」

蒼弥「雨宮さんまで?!」

真夜「休日にレポートを書きに出かけた私」

渚「真夜ちゃんが偶然見かけた私と水谷君」

蒼弥「はたして、真夜はどうするのか?」

真夜&蒼弥&渚「それではどつぞー！」

第3話

私は反対側の道にいる渚と蒼弥を見て
あとをつけることにした

もしかして、蒼弥は渚と付き合うことになったのかしら…？

反対側の道から二人を追いかけていると
二人はそのまま洋服店に入って行った

私は二人が店に入ったのを見届けると

道を渡って二人がいる店の前からショーウィンドウ越しで
見てみた

店の中には楽しそうに手をつなぐ
蒼弥と渚がいた

渚が何か言っと

蒼弥が目を細めてうれしそうに顔をする

完全に二人はお似合いのカップルだった

そうか、蒼弥は渚の思いを受け止めたんだ…

二人の邪魔をしてはいけないと思い

その日は真つすぐ家に帰った

次の週の月曜日

今日から夏休みに入る

私は全校集会のあと

廊下で渚に話しかけられた

「おはよう、真夜ちゃん」

渚はいつにもまして元気な様子だった

「おはよう、渚。なんだか今日は元気ね？」

それとなく私は蒼弥の事を聞こうとした

「だって、今日から夏休みよ？」

確かに、今日から夏休みだけど…

「…そう言えば真夜ちゃん、水谷君に手紙渡してくれたんだね」

渚が私に聞いてきた

「…そうよ」

「真夜ちゃんのおかげで私、水谷君と付き合っことになったの」

「そう…良かったわね」

「えへへ…ありがとう」

なぜだろう

私は親友の恋が成就したことはうれしい

なのに胸がちくちくと痛む

息をするのが辛い

「じゃあ先帰るね、水谷君が待っているから」

「……ええ」

渚はくるりと背を向け

昇降口のほうに歩いて行った

私も帰ろう…

そう思った時

誰かが肩を掴んできた

「真夜、今帰るところか？」

振り向くと、蒼弥がいた

「…そうだけど？」

「一緒に帰らないか？」

「……え？」

蒼弥は渚と帰るんじゃない？

「いや、雨宮さんと帰ることになったんだけど

『水谷君にいつぱい話したいことあるんだ』

って言われたんだけど

なにを話して良いか分かんなくて…

女子同士なら話せるだろ？」

ああ…そういうことね

「…それはたぶん、

渚は蒼弥と話したいのよ

私とではないわ」

そう私が言つと

蒼弥は

「そうなのか？」

と聞いてきた

…蒼弥がこんなに女の子の気持ちに

鈍いとは思ってなかったわ…

「でも、いいじゃん！」

三人で帰ったほうが楽しいだろ？」

「え？あつ…」

そう言つて蒼弥は私の手を引いて
昇降口まで降りて行った

帰り道

いつもは人通りの多い商店街も
午前中はそこまで人はいない

いつもより静かな商店街を歩く私たちは
長い沈黙が続いていた

蒼弥は私を頼りにしていたのか
時々私の方をちらりと見ては
必死な様子で『助けてくれ！』
と口を動かしている

渚はずっと黙っているが

蒼弥と手をつなぎとても幸せな顔をしている

誰かが『初恋は甘酸っぱいの』と言っていた

私は恋をしたことがないから
分からないけど

渚は恋を楽しんでいるということとは
分かった

「じゃあ、私こっちだから…」

私が気づくと

T字路の別れ道で渚が手を振って帰って行った

渚を見送ったあと蒼弥が大きく息を吐いた

そして私のほうを向き

「あそこまで沈黙するとは思ってなかったぞ…」

と疲れきった顔で言った

「…ごめんなさいね」

私がそう言っ

ふと気付いた

「そういえば、私とは普通にしゃべるのね」

蒼弥はきよとんとしている

「え？だって幼馴染だし」

その言葉は

なぜか急に私の心に突き刺さった

どのような意味で蒼弥が言ったのかは想像できる

それは蒼弥が渚に抱く感情とは別であることもわかる

渚とのデートの時に見せたあの表情が

私に見せたことのないような笑顔が

私の心をえぐっていく

「そう、ね」

自分でもわかるくらい声が震えている

「私、ちょっと用事を思い出したわ」

「それじゃ……」

私はその場にとどまることができなくなり走って家にかえった

家に帰って着替えもせず自分の部屋に真っすぐ向かった

そして、私は泣いた

本当に自分がわからなかった

この涙の意味も

そして私はひとつの答えに行きつく

私は、水谷蒼弥が好きだ

第3話（後書き）

こんにちわ、なおとつとデス

最近忙しくてなかなか投稿できずにいました

本当にすいません

今後は結構間をあけて投稿することになると思います

学生の身なのでよろしくおねがいします

第4話（前書き）

真夜「前は急展開だったわね」

渚「…また出番が少なかったわ」

真夜「大丈夫よ。蒼弥を消せばその分出番が増えるわ」

蒼弥「まで！？俺そんなひどいことしたか！？」

真夜&渚「黙れ唐変木」

蒼弥「」

真夜「そんなわけで前回のあらすじ！」

真夜「渚の気持ちを受け止めた蒼弥」

蒼弥「三人での下校と唐変木（？）な俺」

渚「そして自分の気持ちに気がつく真夜…」

真夜&渚&蒼弥「それではどうぞ！！」

第4話

私、蒼弥の事好きなんだ…

今までどうして気が付かなかったのだろう

さっきまでは蒼弥の事を考えることは
どうってことなかった

でも今は

蒼弥を思えば思うほど

きゅっつゅっつと胸が締め付けられる

これが人を好きになるということかな…

これが『恋』なのかな…

でも涙は止まらない

ぬるい涙が頬を伝い床に落ちる

嗚咽とともに吐き出す

「う…そう…やあ…ああ…そう、やあああ…」

この涙は

たぶん蒼弥に自分のことを

一人の女子としてもらえなかっただけじゃない

私の『恋』が

絶対叶わないからだ

渚と蒼弥はもう恋人同士なのだから…

外が暗くなるまで泣きはらした私は

蒼弥にメールを送った

『今夜、話したいことがあります
部活で行ったあの丘で待ってます』

私はそのままあの丘へ向かった

夜空は綺麗に晴れ渡っていた

回りには電灯もないので

空に輝く星がとてもきれいに見えた

天の川をはさんで織姫と彦星が頭の上で輝いている

私は二つの星を見上げていた

この丘に来てもう2時間近くたっている

夏とは言ってもさすがに夜は冷える

手先がだんだん冷たくなってきた

「蒼弥、来てくれないのかな…」

また、涙が出てきそうになった

自分がここまで涙もろいとは知らなかった

「…帰ろうかな」

一人ぼそつと呟き、立ち上がった時

「真夜！」

向こうから走ってくる人影があった

「…蒼弥」

蒼弥は息を切らしてやってきた

「すまねえ、いろいろあって…」

「そう、じゃあ今から言うことを聞いて。冗談ではないから」

「…おう」

私は一回大きく息を吸い
そしておなかの底から叫んだ

「私は、水谷蒼弥が……好きです……!!」

蒼弥の目が大きく見開かれた

「蒼弥には渚がいるのは知ってる、でも私の気持ちを聞いて！
今日の午後ずっと考えていた

蒼弥は私にとつてどんな存在か……
そして分かったの

昔から蒼弥は私に優しくしてくれた
辛いとき、私に声を掛けてくれた
なのに私は自分の気持ちから逃げて
気付かなかった……」

蒼弥は黙って聞いている

自分の気持ちを確かめるかのように

「だからもう逃げずに自分の気持ちに向き合おう!!」

私は最後に自分が出せる精一杯の声で伝える

「でも蒼弥には渚がいるから……だから……!!」

「蒼弥、好きだったよ……、渚を幸せにして……!!」

私はその時
目にはいっぱい涙を溜めて蒼弥にそう告げた

夏休み1日目

渚からメールが来ていた

『水谷君、夏休み明けに引っ越すって本当?』

「…え?」

第4話（後書き）

こんにちわなおとつとデス

更新スピード気まぐれでごめんなさい

今回は短めで真夜の気持ちの整理回となっております

次あたりからこの小説の締めに入ります

それまでよろしくおねがいします!!

第5話（前書き）

渚「はい、前回しゃべらせてもらえなかった渚です」
なんと、今回のあらすじだけ独占権をいただきました！」

蒼弥「…は？」

真夜「つまり、今回のあらすじは渚のさじ加減ですべて決まる、ってこと」

渚「てな訳で今回のあらすじでは水谷君だけ語尾に『にゃん』を付けてもらいます！！」

蒼弥「おい！ふざけるにゃ！」

真夜「あら？かわいいじゃない」

蒼弥「いやだにゃあああああ！！」

真夜&渚「wwwwww」

蒼弥「まじでいやだにゃ…！」

渚「では前回のあらすじ！」

真夜「思いを蒼弥に告白した私…」

渚「そして、引越すことが分かった水谷君…」

蒼弥「…はたしてこの先どうにやるのか…いい加減戻してくれ
やあああー!!」

真夜&渚「それではどうぞー!!」

第5話

「蒼弥が…引越し？」

今日の朝、渚からのメールにはそう書いてあった

「……」

私はすぐに着替えて蒼弥の家に向かった

外に出ると夏の蒸し暑い空気が全身をつつみこむ

朝だというのに照りつける太陽がとても暑かった

蝉の声が延々と鳴り続ける

私は蒼弥の家に向かって走っていた

ちよつと走っただけなのに汗が噴き出る

「はあ…はあ…」

蒼弥の家に着いたときには息が切れて

汗だくになっていた

私がインターホンを押すと

蒼弥のお母さんができた

「あら？真夜ちゃんじゃない、久しぶりねー！」

「お久しぶりです、お母さん」

蒼弥とは家が近所で、ご両親とも仲がいい

「今日はどうしたの？」

「…蒼弥に引越しの事を聞こうと思って」

すると蒼弥のお母さんは驚いた顔で問い返してきた

「え？なんで真夜ちゃんが知ってるの？」

…あまり知られていないようね

「実は…」

「そう、蒼弥に恋人ね…」

私は蒼弥のお母さんに渚の事を説明するため、

蒼弥と渚が付き合っていることを話した

そして、渚経由で私が引越しの話を知ったことを
伝えた

蒼弥のお母さんは少し申し訳ないような顔をして

「蒼弥にはちょっと悪いことしちゃったかしら…」

とつぶやいた

「どづいつことですか？」

「いやねえ、蒼弥ったら最近ぼーっとしてるから

引越しのことも、なんだか曖昧な返事しか返ってこないのよ

だから、勝手にいろいろ私たちが決めていたのよ

彼女がいるのならちゃんと言ってくれればよかったのに…」

そう言っただきくため息をつく

私は蒼弥にも話を聞こうと思って

お母さんに蒼弥に会わせてもらおうと思って

きいてみると

「今日は朝早くから出掛けて行ったわよ

たぶん、真夜ちゃんか、彼女に会いに行ったと思うわ」

と教えてくれた

私はお母さんにお礼を言って

蒼弥の家を後にした

とりあえず蒼弥に会わないと…

そう思って携帯を取り出し
時間を確認する

まだ14時前だ

蒼弥の携帯に電話をかけてみる

しばらく呼び出し音になる

蒼弥はなかなか出ない

しばらくして留守番電話に切り替わった

私はメッセージは残さずに切り

今度は渚の方に電話をかけることにした

しかし渚も電話に出なかった

「…？」

不審に思いながらも

蒼弥の方に

『明日、蒼弥と引っ越しの話について話したいから
家にいてください』

とメールした

「…することもないから家に帰ろうかしら？」

その日、蒼弥からも渚からもメールがこなかった

次の日

お昼近く

私は一回蒼弥の家に電話してみた

『はい、水谷でございます』

すると蒼弥のお母さんが電話に出た

「あ、こんにちは千原です」

『あら、真夜ちゃん…』

その声は昨日に比べて、ものすごく疲れているように聞こえた

「あの…大丈夫ですか？」

私が心配そうに聞くと

『…昨日から蒼弥がどこにいるのか分からないのよ』

…こんどは、行方不明？

『最近ぼーっとしてた理由が自殺とかを考えてた、とかそういうのじゃないといいんだけど…』

蒼弥のお母さんは今にも泣き出しそうな声だった

『ねえ、お願い。些細なことでもいいから何か分かれば…』

「わかりました、何か分かれば連絡します」

『お願いね』

そう言って電話をきった

1日くらい帰ってこなくても普通ここまで心配しないだろう

でも引越しの話や、最近蒼弥がぼーっとしていること

それらが重なって蒼弥を追い詰めているのでは…

蒼弥のお母さんが心配している理由はたぶんこんなところだと
思う

早く蒼弥と会って話をしないと…

一人でブツブツ言いながら考えていると

携帯が鳴った

メールが届いている

それは

蒼弥からだった

いそいで文面を確認する

『今、真夜ん家の前にいる』

窓から玄関の方を見ると

そこには

蒼弥がいた

第5話（後書き）

こんにちわ なおとつとデス

今回は真夜サイドからだとはよくわからない話となっています

番外編で蒼弥サイドから書く予定です

実はこの作品の主人公の名前は友達に決めてもらいました！

蒼弥と渚はワタシが考えました

なんだか残念なネーミングセンスですいません

完結まであともう少しの予定です

それまでよろしく願います！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8335x/>

夏の夜空

2011年11月2日02時09分発行